

アジア時報

9

1977

昭和45年 8月3日 第3種郵便物認可
昭和52年 9月1日 発行
毎月1回1日発行
通巻第89号

アメリカが日本から学ぶもの

エズラ・ヴォーゲル

鄧小平再登場と中国の内政・外交

中嶋嶺雄

10・6政変以後のタイ国

赤木 政

社団法人 アジア調査会

鄧小平再登場と中国の内政・外交

— 八〇年代国際政治の焦点となる北東アジア —

中嶋嶺雄
(東京外国語大学教授)

鄧小平再復活への展望

タイムリーということとは、同時に非常にリスキーということになるわけで(笑い)、明日朝何が起こるか……。

しかし、この会でもかねがね研究を続けておりまして、中国の政治の動きについてはほぼ大筋というか、一つのシナリオは大体描いてきたつもりですから、そういう関連の中で華国鋒体制の問題点を内政、外交両面にわたって指摘してみたいと思います。

鄧小平の再復活がいつかは、非常に注目された課題であったわけですが、どうも昨日のニュースは、ご承知のように、対外経済連絡省という政府の一機関の壁新聞が、鄧小

平の復活を支持する、そして、失脚した前の肩書で鄧小平が復活しているということをおわしているわけですから、でも、きょうの、いまここにいただいた夕刊によりまして、景山公園の近くには四十メートル大のポスターが作られている、と。これは、しかも中国の外交筋もそのことをおわしているというのがある半面、他方では、昨日張った壁新聞が撤去されているというニュースが、きょう昼ごろから入っているわけです。

ということとは、大筋としては、鄧小平の復活は、もうすでにさからうことのできない基本方向でありながら、同時に鄧小平の復活実現までには、これまでもさまざま曲折があったことの延長として、現時点でもその鄧小平の復活に

対するさまざまな抵抗要因というようなものが存在しているということを示唆しているのではないかという気がいたします。

それではなぜ鄧小平の復活がそんなにすんなり行かないのか。ご承知のように、鄧小平の再復活問題が出てきたのは、今年の一月初旬ぐらいからでして、もちろん一般的な推測としては、その前からあったわけですが、今年の一、二月、周恩来死去一周年前後から北京の壁新聞の中では鄧小平の再復活を望む声があちこちに出ていたわけですね。つまり、民衆レベルにおいては、鄧小平の復活を要望する民意の流れというものは、もうさからえないものであった。にもかかわらず、今日までかかっている。しかも、この間、廖承志さんをはじめ李先念、あるいは譚震林等々の中国の首脳が、いずれも鄧小平氏の復活の近いことを、非公的に予告し、あるいはかなり確定的な推測を流しながら、いままでも実現しなかったというところに一つの注目点があるわけですね、これはしたたかな政治家である鄧小平が単に再び姿を現すというそれ自体非常に劇的なドラマがいつ演じられるかということだけではなくて、やはり、もっと根本的な問題を含んでいるからだろうと思うのです。

その根本的な問題というのは、たとえば、形式の上からいうと、よく指摘されていることではありますが、昨年の四月七日の二つの党中央政治局の決議。これはご承知のように、二度失脚して、二度復活するという鄧小平の政治的ドラマを超えた大きな問題を含むような気がするわけです。

「三株毒草」から「三株香花」へ

そういう前提のうえで、最近のいろいろの状況を見てみたいと思うのですが、すでにご案内のように、最近の中国の諸論調を見ても、あらゆる点において、鄧小平がかつて鼓吹した路線、つまり「走資派」の路線ですね、具体的にいうと、例の「三株毒草」といわれたものが、完全に復活しているのみならず、鄧小平の正しい政治路線をゆがめようとしたとして四人組が激しく批判されているという現状であります。

この「三株毒草」について、ちょっと簡単に申し上げると、一つが「全党全国各項の工作の総綱を論ずる」。二番目が「工業の発展を早めることに関する若干の問題」、それから三番目は「科学院の工作報告の提綱」というこの三つの文献です。

これは、これまでかつて「走資派」批判の段階から断片的には出ていたわけですね、それはいうまでもなく「こういうけしからん悪いプログラムを作っている。これこそ黒い綱領である」という形で批判されていたものが、最近い

に、一方では鄧小平のあらゆる職務を剝奪したわけですね。

他方では、それと同時に、華国鋒を党第一副主席兼國務院の首相という異例の抜きを行って、いずれも「毛主席の提案に基づき」という形で処理してきているわけですから、形式的にもそのこと——つまり、敵対的矛盾として処理され、反革命分子として追放された鄧小平を再び中国の政治の局面に出現させるということには、形式的にも一つの大きな問題があるわけです。もちろん、そのこと自体を、どういうふうに処理するかということが恐らくいまの中国でいろいろ考慮されていることだろうと思いますが、より根本的には、鄧小平という人物が、いわば現代中国において果たしてきた政治的軌跡、そして、あの文化大革命にいたるまでいわゆる実権派路線を敷き、そして、文化大革命の激動にもかかわらず、再び大胆不敵にも「走資派」といわれながら、最後まで悔い改めなかったというその強烈な個性からして、鄧小平の復活そのものは、やはり少なくとも文化大革命以降の十年間の中国の政治路線そのものを根本的に総括し直すということにつながるわけですね、ひいては、毛沢東思想、ないしは毛沢東路線というものの意味を根本的に問い直すことになる。そして、それと同時に、すでに着々と始まっている非毛沢東化という一つの歴史的な方向というものを、決定的にアクセラレートすることになるわけですね、こういう非常に根本的な問題をその背景に持

のうちに一番根本的な「総綱について」というのを、この間ある雑誌に翻訳したのですが、これなどを見ておきますと、いわば現在の中国の基本路線を非常に大胆に設定している。

それは、基本的には、いわば「四つの現代化」といわれる周恩来路線といってもいいでしょうが、かつてさかんに批判され、北京政変以後復活したあのいわゆる「現代化路線」ですけれども、こういうものが全面的に今日出ているわけです。

この「総綱を論ずる」ほか二つの綱領的文献が書かれたのは、七五年の秋です。七五年の秋というと、ちょうど『水滸伝』批判が起こっていた時期でして、たしか私もこの研究会で「杭州事件から『水滸伝』批判へ」という報告をしたことがございました。そのときに、当時『水滸伝』、つまり「現代の宋江」になぞらえられているのはだれか、という推測があつて、たしか私は周恩来、及び鄧小平というものを対象にあげたわけですね、その杭州事件から『水滸伝』批判を経て、やがて翌年「走資派」批判が吹き荒れる、その前段階の時期、これは同時に、一方で潜在的にそういう鄧小平、ないしは周恩来に対する批判が進行しながら、他方で鄧小平が最も活気を帯びて活躍していた時期です。ご承知のように、キッシンジャーや、フォードなどと会っている時期で、内外ともに鄧小平を周恩来の後継

者というふうを目していた時期ですけれども、まさにこの時期に、鄧小平は、毛沢東以後の中国のあり方というものを根本的に規定するような政治的プログラムを準備していた。ここに、鄧小平の鄧小平らしいしたたかなビジョンと、一つの党官僚としての並々ならぬ手腕というものがあのような気がいたすわけですが、そのときに書かれた三つの基本的な文献が、いま言ったようなものなのです。

とくに、一番注目すべきなのは「総綱論」。つまり「すべての要を論ずる」というものでありますが、これなどを見てみると、これは、いわば文化大革命や、あるいはこれまでの中国、毛沢東路線というものと大きく乖離し、むしろ積極的に、意識的にそこから離脱し、アンチテーゼを出そうとしているというふうに考えざるを得ないわけですが。

とくに、それは周恩来が七五年の第四期全国人民代表大会で提案した「四つの現代化路線」、すなわち、今後二十五年間ぐらいのうちに、国民経済の偉大な任務を成し遂げて、二十一世紀を迎える、そういう富国強兵路線。具体的には、一九八〇年までに、独立した、比較的整った工業体系と、経済体系を作るんだ、そして、今世紀のうちに、農業、工業、国防、科学技術の現代化を行うんだ、というあの基本路線に従って問題を提起しているわけですが。

しかしながら、この「総綱論」は、そういう経済理論だけではなく、この「総綱論」は、そういう経済理論だけではなく、単にいわば文化大革命に反発し、批判するということを超えて、鄧小平なりの中国社会再建へのビジョン、あるいは、中国社会主義再建へのビジョン、あるいは、このような形で持っていたということに、やっぱりわれわれは大きな驚異を感じざるを得ないわけですが。

で、こういうものであったわけですが、それはまた同時に、「総綱論」のみならず、「工業の発展を早める若干の問題」とか、「科学院の提綱」などを含めて、なかなか読み出のあるものです。

こういうものが出されていて、それに対して、三株毒草というような非難の言葉があったにもかかわらず、今日では、たとえば七月八日の『人民日報』に見られるように、「四人組の『総綱を論ずる』に対する批判を批判する」というような論文——これは副題ですが、本題は「復活の旗印を掲げて復活を行う」——が出ています。つまり「三株毒草」から「三株香花」への転換なのです。こういうふうに見てみると、理論的、政策的には、すでに現在の中国の体制は、完全に鄧小平体制、ないしは鄧小平路線だといっているのではないか。

けではなくて、いかに文化大革命というものが中国社会に大きな損失であったか、それから、階級闘争、毛沢東のいういわゆる階級闘争なり、継続革命の論理というものが、いかに中国社会に大きな弊害を与えてきたか。たとえば、すぐに口を開けば階級の敵というようなことをいうけれども、一体社会的な存在としての階級というのがあるかどうかということも含めて、大胆に問題を提起しているわけですね。

そして同時に、この中では、いわば「政治突出」というものももたらした弊害をいくつか具体的に指摘しております。そして、当然、中国が今後生きのびていくためには、あるいは、さらに発展していくためには、経済の論理が、あるいは生産力重視の論理が優先しなければいけない。そういうことをいうと、すぐブルジョワ的だとか、生産力理論であるとかいうような考え方をそのものを根本的に批判するような論調です。

そして、当面は、第五次五カ年計画を中心とするいくつかのプログラムにおいて、たとえば、企業の問題、あるいは企業における責任の問題、あるいは責任制の確立した企業の管理をいかにすべきか、そのためには、思い切った企業の整とんをする必要がある、と。

これらは、後にお話しますように、すべてこの間の四月の大慶の工業会議で中国の首脳部が受け継いでいる言葉で、で、そうしますと、理論的、政策的には、完全にそちらの方向に行っているという状況ですね。この状況は、やはり鄧小平にとっては、非常に有利な状況がもうそこにできてきているということです。

「鄧小平路線」の定着

そこで、こういう状況をもう少し詳しくかめるために、この間の四月二十日から五月十三日に行われた大慶の工業会議について見てみたいと思います。

私は、かねがね、現在の華国鋒体制ということにも問題があるのではないか。というのは、現在の華国鋒体制というのは、いわば、昨年の北京政変以来自己のレジティマシーを高く掲げて、大きな声を張り上げて四人組を批判しておりますが、今日に至るまで制度的、組織的な認知を何ら得ていないということですね。つまり今日の時点ではまだ中央委員会さえ聞かれていない。したがって、これは、自作自演のクレーターをやって、しかも、自分が後継者だということを行っているに過ぎない、というふうにもみることもできるわけで、そういう状況の中で、いろいろな人事的な補填もできておりませんし、第一、あれほどの大きな変化が起きながら、中央委員会さえ聞かれないような、そういう状況を華国鋒体制、レジームというふうに呼ぶことができるかどうか疑問なんです、そういう前提の中で、と

もかく注目すべきものは、工業は大慶に学ぶ会議であったわけです。

これは、ご承知のように、昨年十二月の下旬に開かれた農業は大慶に学ぶ会議を受けたその工業版ですけれども、これまで大慶工業会議というのは、すでに早くは一九六〇年代から何回かそれに学ぶ会議が開かれていますが、今度の会議は、やはり規模が一番大きかったということですね。しかも、その会議自身が、いわば完全に鄧小平の「総綱論」の立場から開かれていたといってもいい、そういう状況でした。具体的には、報告をした華国鋒、それから葉劍英、それから余秋里副総理等の報告を見ましても、みんな、全部鄧小平の言っていることを繰り返しているというふうにさえ感ぜられるような雰囲気です、一体これはどうしたことかと、私自身思わざるを得ないわけです。

こういう状況を見てみると、なおさら鄧小平の復活がすんなり行かないということに疑義が出てくるわけで、これにはやはりそういう政策的、理論的な問題よりも、やはり党中央、最上層部におけるいわば政治的な角逐という問題がそこに存在しているのではないかと考えざるを得ないのです。

その問題にふれる前に、最近の基本方向を示すもう一つのスローガンを見てみたいと思うけれども、これは日本の謬論を批判すること。
労働者階級の隊列を分裂させた四人組、及び血盟の友の謬論を批判すること。
生産力に力を入れることは、生産力論だという謬論を批判すること。

管理に力を入れることは、管理制限抑圧だという謬論を批判すること。
経済的採算に力を入れることは、すなわち利潤第一だという謬論を批判すること。

技術者の役割を發揮させることは、専門家による工場管理であり、技術と業務の研鑽を積むことは、ブルジョワ専門家の道を歩むものであるという謬論を批判すること。
集中した統一指導を強めることは、関係部門による企業の直接的、排他的管理だという謬論を批判すること。

外国の先進的な経験を学び、必要な新技術を導入することは、洋奴哲学、牛歩主義だという謬論を批判すること。
大衆の生活に関心を寄せることは、物質的刺戟である。で、ことを運ぶものである、という謬論を批判すること。

つまり、洋奴哲学ですね、あるいは日本などと貿易すること、あるいは、日本から技術を導入すること等は、ご承知のようにさかんに走資派として批判された。これらの問題が完全に黒白が転倒して、価値観が全く変わっているわけです。

こういう状況の中に、現在の鄧小平問題があるというこ

新聞にもちょっと紹介されておりましたが、最近の中国では、四人組批判の一環として、いろいろの言葉が出ているわけです。たまたま、いまそういう用語を集めて、編集している仕事をやっていますが、拾うのにいとまがない。毎日のようにいろいろな言葉が出て参ります。

その中で注目すべきものに「四大講」。これは何かというと、四人組がのさばっていたときに、その害毒を蒙った党、国家、工場、個人の深いうらみを大いに語ることに語ること。四人組と真っ向うからの闘争を行った経過を大いに語ることに語ること。華国鋒主席、党中央の「かなめをつかんで国をおさめる」という戦略的決定を貫徹する決意と、そのために講ずる措置を大いに語ることに語ること。というようなことを指しているわけです。これらは、たとえば鞍山の鉄鋼会社の党委員会などが「鉄鋼生産の発展のために、大いに四大講をやらなければいけない」というような決議をやっております。

それからもう一つ面白いのは、「十大批」。十の大きな批判、というのですけれども、これも「四大講」とともに対になっておいて、最近さかんに強調されるのですが、ご参考までに紹介しておきますと、

社会主義の歴史的段階における敵、味方の関係を転倒させた四人組の謬論（誤った理論）を批判すること。
党の指導に反対した四人組の謬論を批判すること。

とですね。このことをやっばり十分理解しておく必要があるような気がします。
しかも、そういうことは、とくに、かなり個別的なスローガンにもなっております、企業管理、たとえば「三老四敵」なんていうスローガン。ラオ(老)、これは誠実な、という意味ですけれども、四つの敵しい、というのは、厳格な要求、厳格な組織、厳格な態度、厳格な規律をもって企業や生産単位をいわば律していかなければいけない……。

そういうのを取り上げるとキリがないのでこの辺でやめますが、それから最近の「三結合」といわれるのは、老中青の三結合であるよりは、労働者と、幹部と、技術者の三結合。つまり、非常に中国社会自身が、いわばテクノクラート優先の社会、そういうような状況が出てきているような気がします。こういうこと自身が、鄧小平路線というものの内容を、いわば意味づけてきているわけでして、こういう状況があるのではないか。

そこで、それでは、やっばり鄧小平がそれだとすると、もっとすっきりした形で出てきてもいいのに、出てこないのはなぜかという問題。それは、私は結局は非常に常識的な結論なんです、華国鋒そのもの、ですね。華国鋒と、鄧小平の間の矛盾。言ってみれば、華国鋒体制そのものの危機というものにつながるのではないかという気がする。

華国鋒指導部の不安

一般に、新聞論調なんかを見ておきますと、鄧小平の復活にとって、華国鋒体制はゆるぎなく、車の両輪のごとく行くというような議論もありますが、これは残念ながら私は、昨年の北京政変によっても依然として中国政治のある種の悪循環というものは、断ち切られていないと思うのですね。

したがって、ある種のスマートな集団指導体制というようなものが行くような状況にはまだやっぱりないのだというふうに考えざるを得ない。それは同時に、中国のポリティカル・カルチャー（政治文化）の性格からしても、依然としてそうだと思うのですが、そのことを考えるには、どうしても簡単に昨年一年来でいいと思えますが、一年来の鄧小平、華国鋒間の出会いというものをサッと振り返ってみる必要があるのではないか。

ご承知のように、周恩来が亡くなったときに、一月八日の周恩来の死のあと、一月十五日の周恩来葬儀に、弔辞を述べたのは鄧小平でした。その鄧小平は、まさに周恩来路線の継承を誓って「四つの現代化をやり遂げます」というような弔辞を述べたわけですね。そのことにいら立ったいわゆる文革派の人たちは、急拠、鄧小平打倒に乗り出していくわけですが、それ以来鄧小平は今日に至るまで

姿を現していないわけですね。そして、二月の上旬には、走

資派批判が起こるわけです。まさに、あれは二月七日の日、清華大学の壁新聞が、走資派という言葉を再びクロージアップさせて、今回のキャンペーンの中で初めて走資派という言葉が出てくるわけですね。その翌日、全世界は、華国鋒というすでに國務院のNO6、副総理兼公安部長でしたけれども、一般には耳慣れない人物のクロージアップを聞いてア然としたわけです。それが二月八日。つまり、鄧小平、華国鋒間の出会いの第一ラウンドは、片方の地位が衝撃的に上昇し、そして片方がいわば批判され、蹴落されるという状況の中にあっただけです。

その第二ラウンドは、いうまでもなく天安門事件です。この天安門事件は、ご承知のように、鄧小平があのよるな形で批判され、失脚して行った。そしてさっき言った二つの決議によって鄧小平が反革命分子、つまり敵対的矛盾として処断され、党籍だけは残るものの、あらゆる職務を剥奪されて失墜して行くわけです。そのときに、まさにそれと同じ日に、同じ決議によって華国鋒は党第一副主席兼首相という……。その第二ラウンドも、非常に衝撃的に、鄧小平と華国鋒の間の存在というものがクロージアップされて、片方の台頭と、片方の失脚というものが決定的になったですね。

これらの経過をざっと振り返ってみただけでも、両者の

間の関係というものは、そう単純ではない。それはいうまでもなく、華国鋒そのものの体質にもよるわけですが、これは仮設でしかないわけで、あるいは将来いろいろの状況によって検証し直さなければいけないと思えますがやはり華国鋒という人物は、そもそも根本的には、一九三〇年代の終りぐらいから、何らかの形で毛沢東との接触があった。それは、汪東興がちょうどその時期以来そうである。そういう意味では、延安に出てきた江青夫人よりも前から関係があったような気がします。そうすると、そもそも上海グループ、いわば、あとに江青夫人が上海でピックアップした若手の文芸サロンを中心とするいわば四人組の連中よりも、もっと以前から毛沢東の側近であっただけに、そこに彼女たちが出てきたことにそもそももいら立ってずっと来たのだらうと思えます。しかしながら、これは明白な事実として言えることですが、華国鋒は毛沢東の故郷の湖南省湘潭県に二十年も書記として存在したことでした、その二十年間は、何をやってきたかという、党の、

とくに公安関係の仕事をやってきたわけですね。一九五五年の例の『学習』に載っている当時の華国鋒が書記として書いている論文、これは私翻訳したが、これなどを見ても、華国鋒の任務というのは、彼が土にまみれて農村工作をやることではなくて、いかにいわば農村における地主階級、ブルジョワ階級を摘発するか……彼の言葉の最後は、中国

語では非常に珍しい言葉ですが「肅清」という言葉をさかんに使って、それで結ばれている。つまり肅清をやる音頭をとっていたわけですね、そういう状況の中で二十年間を過ごし、そして文化大革命で湖南省の革命委員会第一書記になり、さらに党委員会の第一書記になったわけですね。そして、林彪事件以降、林彪事件処理の審査委員会の秘处长という重責を担わされて、北京に登場する。そういうキャリアを考えると、いわば、密教的な中国社会において、非常にそれなりのやはりキャリアを持っていた人物であったということをお認めざるを得ないわけですね。そういう状況ですから、文化大革命に旗を振り、同じ文革派でありながら、やはり四人組とはいずれは食うか、食われるかという状況があったわけですね。

こういうふうに考え、それに鄧小平といういわば人物像をかぶせてみると、四人組打倒という点では完全に利害は一致するのですが、そのことと、鄧小平、華国鋒の間には、まだまだ大きなギャップがあるわけで、昨年の「走資派」批判の段階では華国鋒も鄧小平を名指しで激しく批判しております。しかもそういう状況であるにもかかわらず、私は決定的に四人組と華国鋒が決裂して行ったのは、やはり天安門事件以降だと思っております。そして、毛沢東の死に近いという状況の中で、いわば毛沢東の側近であることから離脱しない限り自分の将来もないと思う人たちが、

いわば急拠クーデターを行ったのが北京政変だというふうに考え、ほぼ大筋はそういうふうな考えられているわけですが、そういうふうになると、ここにはやはり鄧小平のように、一つの理論的にも、路線的にも、本質的に文化大革命の論理と反する、いわばそういう党官僚と、華国鋒のように、いわば政治権力の角逐の中でのみいわば四人組を打倒することになったりして行ったグループとの間に大きなやはり開きがあるわけです。

それは同時に、毛沢東思想に対するロイヤリティの問題をめぐっても非常に大きな考え方の違いがあるはずで、恐らく鄧小平にしてみれば、まさに毛沢東思想を乗り越えなければダメだというふうな思っていると思います。それに対して、華国鋒は、とにかくそれを護持することによってしか自分の存在、レジティマシー（正統性）というものが無いわけですし、こういう状況があるような気がします。

そして、そういう状況があればこそ、鄧小平問題というのは、さきほど申し上げたように、単なる鄧小平のリハビリテーション（復活）というような問題だけではないわけです、そこに華国鋒としては、なかなか正規の会議を開けない。会議を開くこと自体がこわいのではないか、あるいは、会議を開いても、自己が演出した北京政変というものを積極的に納得させるという論理というものを持たない。従って鄧小平再復活を「危険な代償」として会議を乗りき

ないという状況なんですね。

ところが、社会的要請としては「いままでの十年間」、あるいは「文革よ、さらば」という「もう二度と文革を語りたくない」という気持があまりにも中国社会の中に澎湃と、あるいは潜在的に大きな潮流としてあるが故に、政策的にはどうしても鄧小平路線に乗りざるを得ないのでないか。華国鋒自身が大慶で語っている演説などをみても、これはやはり鄧小平の言葉を繰り返しているにしか過ぎないと言わざるを得ないわけですし、華国鋒自身に内政、外交についての大きな指導力と、大きな理論的バックボーンがあるわけではない。こういう問題があるのではないかと思います。

したがって、このことが結局鄧小平問題というものをすっきりした形で処理できない、そういう華国鋒体制の根本的な矛盾ではないかと思うのです。現に、中国社会の内部には、いろんな動きがまだまだ潜伏しておいて、華国鋒のやり方自身が毛沢東思想に反しているのではないか、なぜ彼らは、あのような形で処断しなければいけなかったのか、闘争、批判、改革というのが毛沢東思想ではなかったか、あるいは、団結、批判、団結というのが毛沢東思想ではなかったか、というそういう懐疑はあるわけですね。

しかも、どうみても、喪が明けないうちにルール違反をやったのは華国鋒である、そういういわば状況は、とにかく

る以外にはないのではないか。ここに華国鋒体制の根本的な弱点と、矛盾があるような気がするのです。

したがって、華国鋒のできることは、四人組がいかに悪らつかという、そういう旧罪を衝撃的に暴露するという、そういう暴露戦術でしかなくて、少なくとも北京政変というものを理論化することができない。つまり、社会主義の論理、あるいは共産主義の論理、共産党の理論によって、あの北京政変ということを理論化できないわけですし、そうすると、一方における自己の英雄崇拜を行わざるを得ない。やはり、最近の華国鋒の英雄崇拜というのは、依然として続いているわけで、どこにでも華国鋒の写真がこうやってたくさん出ているわけですね。毛沢東の写真と同じように、これを見ても、やはり中国の政治というのは、依然として本質的に変わらないのだなあとということを感じざるを得ないわけです。

こういう状況を考え、そしてしかも華国鋒にとっては、現在の華国鋒というのは、形式的には毛沢東も、周恩来も兼ねたことのないような、党、政、軍の三権を全部握っている。これは、いわば、華国鋒があつた十月の北京政変によって、十月七日一挙に握った、そしてあの同じ日に政治局が華国鋒を党主席兼軍事委員会主席にしているわけですが、そのことによって握った権力を分散することもできません。ですから、一生けん命それを握っていることしかでき

く四人組に対する憎しみというものがあつたからこそ、四人組が打倒されたときは「第二の解放」だとか拍手喝采したわけですが、時が経つにつれて、やっぱりさめた認識が出てくる。そういう状況は、鄧小平にとっては有利であっても、華国鋒にとっては非常に不利な状況になってきて、どうもいまの中国を見ていると、華国鋒の位置というものは、どうもびったり何か座らない。そういう感じを私は持つわけです。

しかも、そういう中で、一部には新四人組に対する批判というふうなものもあるし、この四月、五月は、清華大学の壁新聞ですが、たとえば三月十四日の向文論文批判ですね、最近華国鋒体制、いわば現在の体制側を代弁するような論調をみんな向文という、かつての梁効ですね、四人組時代しきりに使われたペンネームですが、いろいろな論文を書いているのですが、それに反対する壁新聞なんかも出ていたこと、これは新聞にもちょっと報道されておりまして、こういうものを見ると、いろいろすっきりしないものがあるような気がするわけです。

そうすると、やはり鄧小平復活によってもたらされるものは、まず第一に、華国鋒体制の危機ということ、あるいは、今後どうなるかといういわば流動化ではないかという気がします。

そして、もしも鄧小平が名実ともに復活するということ

になると、その次に来るのは、やはり現在進んでいる非毛沢東化というものが、どういう形でさらに進むのかという問題があるような気がしますね。

そういうふうと考えていくと、まだまだ中国社会なり、中国の政治的状况というものは、非常に流動的な状況にあって、いまの状況だけですぐ結論が出せない状況にあるような気がします。

さて、そういう中国の内政の方向なんですけど、きょうは、外交問題ということにもなっておりますので、若干外交問題について、次に、いまのような内政を反映して、どういうふうなことがいえるかというようなことをお話ししてみたいと思います。

鄧小平再登場と中国外交

外交問題で大きく注目すべき問題は、三つあると思うのですが、そのうちの一つは、最近のアルバニアの動き。アルバニア、中国の間の関係の変化、衝撃的な変化というものです。これなどを見ると、やはり国際関係というようなもの、十年ぐらいの単位で動くものだなあとということをつくづくと感ぜざるを得ないので、ご承知のように、七月十二日にアルバニアの大使館は、『ゼリ・イ・ポプリト』。例の労働党機関紙ですね。「革命の学説と戦線」というパンフレットを配布いたしましたして、北京でそれを配

布することによって、公然といわば現在の華国鋒体制に反旗をひるがえしたわけです。これは、どちらかというと、その全体の論調は、新四人組、つまり文革路線だといっているのではないか。

これに同調するとか、同じ系列のもので、小さな動きで、政治的にはとるに足らないのですが、注目すべきなのは、日本共産党の田山口左派の動きですね。ご承知のように、これは日中友好協会正統本部とも対立して、日中友好運動からの撤退を決議しております。そして、日中友好運動もやめて、日本アルバニア協会を作って、その中で新しい運動を行おうとしているわけですし、これなどがそこに連動するわけです。彼らはやはり公然と四人組擁護の旗を上げていくわけですね。つまり、現在の華国鋒体制こそ修正主義であるというふうに見るわけです。

こういう立場からすると、当然鄧小平ラインも批判されなければいけないわけですし、米中国交への動きだとか、日中接近なんていう問題も批判されなければならないだろうと思います。

これがどういう政治的意味を持つかは別にして、なぜこの時点で、なぜこういうものが配布されたかということが興味深いわけで、アルバニア大使館としても、かなり中国の情勢をつかんでいるのだろうと思います。そうであるが故に、こういうパンフレットをあえて公然とそこに配布

したということは、一方ではアルバニアと中国、アルバニアとソ連というような関係が一つここで大きく流動化する可能性がある。チトー亡きあとのバルカン半島の変化を含めて、この辺が流動化するのではないかとという予測でもあるし、やはり北京でこういうものをいま撒いたということは、それなりにこういうものを撒くことによって華国鋒体制をある意味ではゆさぶるなり、華国鋒体制の中にもそれに同調するような動きがあるのではないかとということを見込んでいないか、という気がします。そうなるのと、この問題と、鄧小平復活という問題をかぶせてきますと、かなり今後注目すべき動きがこの辺りから出てくるかもしれない。

二番目は、米中関係ですけれども、バンス米國務長官がこの八月の下旬に訪中するわけですね。前にも、宇佐美滋氏の報告（本誌四月号「カーター外交の行方」）のあとにちょっと私申し上げたと思うけれども、アメリカ国内には、最近米中国交正常化への動きがいろんな形で高まってはいるのですが、結論だけ申し上げると、バンスの訪中は、非常に事務的なもので終わるのではないかと私は見ております。つまり米中国交というような儀式が行われるには、まだまだ状況は整っていない。『ニューヨーク・タイムス』の六月二十六日に、ワイン・ラウ記者が、アメリカが米中国交の筋書をいろいろ検討している中で、メモラン

ダム二十四号というものを書いた、というのを大きく取り上げていますが、これは米中軍事提携辞せずというような意見があるけれども、それはやっぱり慎重にならないければいけないのだ、そういう問題を、あえて——これはリンクではないかと思うのですけれども——しているあたりは、たしかにアメリカ国内にもいろいろな動きが出ていることを示唆しております。たとえば、最近私の会った学者の中でもD・S・ザゴリアみたいな人ですね。ああいう形に代表されるような人たちは、さかんに日中の提携を説いているわけで、日本は即刻覇権条項入り日中平和友好条約を結ぶべきだ、場合によっては、いまの自衛隊と中国との関係をもっともっと緊密化すべきだ、ということも言うんですが、そういう意見がアメリカ国内の一部にあるにしても、そしてカーター政権は、そういう意見に若干とらわれやすい体質を持っておるし、もっと本質的には、グラム・ドクトリン、あるいは新太平ドクトリン以降の米中関係というものは、そういう方向に基本的には行きつつあると思うのですけれども、しかしながら、現時点において、国交樹立というところまで行くには、アメリカとしてはまだまだやらなければいけない問題がたくさん残っているわけで、ある意味では、すでにソ連を訪問しているバンスが、中国を訪問しても何らおかしくないというようなレベルのものではないか、という気がします。

そうしますと、今度は中ソ問題で、やはり、中ソ関係は、北京政変以来いろいろな動きがあって、すでにみなさんご承知の通りの動きでございました。そして、結局中ソはそう簡単に和解するものではないという意見が支配的だと思います。アメリカでも、そういう意見が強くなっていますし、日本の論調もそうですし、私自身も、基本的には中ソは簡単に和解するものとは思わないのです。

ただ、かつてあるところに書いたように、それは、すべてこれは鄧小平という人物、あるいは、鄧小平的なラインが中国の中にどのような形で生きてくるかということにかかってくるのではないかと。仮りに、鄧小平の本籍を實権派というふうに考えると、やはり實権派レベルにおける中ソ関係と、いわば文革派レベル、あるいは、毛沢東における中ソ関係というのは、ある意味では本質的に違う。で、内政上の違いというのは、外交的にも本質的にやはり違ってきているわけで、それが故に、かつて羅瑞卿みたいに、實権派のレベルで中ソ政策を遂行しようとした人物が失脚したわけですから、その点からしても、かなりポリシー・オリエンテッドな中ソ関係の選択を中国がするような時期が出てくるのではないかと。そのことは、つまり、毛沢東のように、何でも、感性的、あるいは感情的に、ソ連と席を同じくせず、ソ連憎し、というのではなくて、状況次第によって、中国自身が選択的に中ソ関係を動かせる、そちら

政問題を一つのテコとするような形での、それが一つの重要なモメントになるような変化があるいは起こるかもしれない、そういう意味でも、鄧小平の復活については、もう少しわれわれ十分吟味してみる必要があるような気がします。

そこで、最後に、現在の中国のリーダーシップを見てみますと、『ニューヨーク・タイムス』の六月二十一日付バタールフィールド記者は「台頭するいわば二頭政治」というような言葉を使って華国鋒と葉劍英というようなことを言っているわけですね。それは、ほとんど鄧小平というものをおさえていないような気がするけれども、私の感じは、全くそうではなくて非常に基本的なベースとしては、鄧小平なのであって、その基本的なベースにしろは、鄧小平についているのが華国鋒だというような気がするからです。それは、ある意味では、鄧小平の年齢ということもあるけれども、単に鄧小平のそういう個人を超えて、鄧小平ラインというものに注目していいのではないかと。

それから、葉劍英については、これは最近いろいろな注目すべき状況があるわけで、たとえば葉劍英の詩がさかんに持ち上げられている。これは毛沢東の息子の毛沢民もさかんに、葉劍英の詩をお父さんの毛主席が学べと言った、と、さかんに葉劍英の詩、あるいは直筆の格言などが『人民日報』に最近出ているんですね。だけれども、そ

の方向に行くという様相があり得るわけでして、これは、その理由をいろいろ申し上げる時間がありませんから結論だけ申し上げますけれども、やはりそういう余地というものを私共見えておく必要があるような気がします。

それらの問題を含めて、このアジア調査会の今年度の新しい研究テーマが「アジア一八〇年代の展望」ということですが、やはり中ソ関係、米中関係などを含めて、単に中ソ友好同盟条約の期限が一九八〇年に切れるという問題もありませんが、それらを含めて、北東アジアの国際関係というものが、何となく朝鮮半島がらみで一九八〇年という時点で一つ流動化するという可能性もなきにしもあらずでして、いずれにしても、そういう流動化するような状況が徐々に煮詰まってくる、そういう意味でも八〇年というのは、国際政治の季節としては、北東アジアの季節になっていくことはほぼ推測できるのではないかと。

こういう中で、中国が実権派的なものを出していく。そして、その限りにおいて、仮りに中ソ関係がある程度、いわば関係改善というものが起こる、と。それからそのときに、北朝鮮がどうなのか、ハノイはどうなのか、日本共産党は、いまの参議院選挙の結果のような状況の中で、やっぱり共産党は共産党だということを考え始めないか、いろいろなことを見てゆきますと、やはり近い将来、ここ数年間の北東アジアの情勢の中身は、まさに中国の内

のことが、葉劍英自身がいわば大きな役割を果たすということになるのかどうか。私は、どうもそれは疑問のような気がする。やはり、葉劍英という人物は、長老であるだけに、そういう役割がある意味では果たすのでしようが、基本的には、葉劍英自身ややっぱり周恩来と非常に近かったわけですし、あの鄧小平と同じように客家の出身ですし、そういうことを考えますと、いわば葉劍英を持ってきて二頭政治というような見方はできないのではないかと。

で、何となく華国鋒体制というものがあるとすれば、華国鋒、汪東興、呉徳、紀登奎といういわゆる新四人組というような形で批判される人たちが。これに陳錫聯などがかなり軍の中でいわばそれらをサポートしているような感じがあるのです。一方は、やっぱり鄧小平でして、その鄧小平の背景には、いま言った官僚レベルでは李先念とか、葉劍英。葉劍英が官僚といえるかどうか、軍人ですけれども、まあ実務派ということですね。それから余秋里というのは、経済閣僚としては最近かなりのしているような感じがいたします。それに、軍の中では、許世友、韋国清というような連中が、いわば鄧小平をバックしているような感じがいたします。ほぼそういう構図が描けるのではないかと。

そうすると、全体的には、やはり鄧小平ラインというものが、かなりの大きな力を持っているだけに、いまやはり華国鋒としてはあまり心穏やかではないのじゃないかと、

というのが私の見方です。

きょうは、いろいろなニュースが昨夜から入ったりして、私の議論は、だいぶスペキュレーションも入っておりますが、討論のための刺身のツマにしていたかどうかには格好の問題提起ではないかというふうに思っていますので、どうぞご批判いただければ、と思います。

【追記】 この報告をおこなった翌々日（七月二十二日）、中国は三中全会が七月十六日～二十一日に開催され、鄧小平再復活が決定された旨を公表した。しかし、私の報告に修正を加える必要はなかったため、このまま掲載することとした。

（昭和五十二年七月二十日のアジア調査会アジア研究委員会の報告記録、文責＝編集部）

（第八巻）（昭和五十二年）

三月号（座談会）華国鋒治下の中国：G・カミンスキー、坂本忠、中嶋嶺雄、江頭数馬、宇佐美滋／中国から見た世界と私のみた中国：佐伯喜一／タイ国政治の実情：ウクリット・モソコナウィン

四月号 世界と日本・みたまを感じたまま：三宅重光／カタール外交の行方：宇佐美滋／「近代化と教育」M. D. Shipmanの考察からみた開発途上国の教育の課題：佐藤信雄／中国の文字改革論争（F. E. R誌特約）デービッド・ボナビア／北京の金塊輸出（同）ピーター・ウェイントローブ

五月号 中国・イラン・インド三国を歴訪して：河野謙三／日米共同声明後の朝鮮問題：神谷不二／シンガポール・マレーシアにおける現代華語文学の歴史と現状：小木裕文

六月号 華国鋒体制下の中国の印象：土光敏夫／訪中所感：上枝一雄／数量的側面からみた中国経済：尾上悦三

七月号 バリ首脳会談以後のASEAN諸国と日本：松本三郎／バリ村落における階層構造と農業生産の現状：戸谷修／揺れ動くインド亜大陸の政治：小沢秀匡／華国鋒の「黒い手先」肅正（F. E. R誌特約）デービッド・ボナビア

八月号 アジアⅡ八〇年代への展望：岡部達味／バリ島村落の社会組織―水利共同組織と慣習村：戸谷修／中東和平と大国外交：安延久夫／パキスタン、軍部介入で政局収拾：小沢秀匡／鄧氏復活と華体制の今後：平田昌弘